

C. W. ニコルの 森の時間



Life in the Wood

C.W. Nicol

訳 森 洋子

C. W. ニ コ ル の
森 の 時 間

訳 森 洋子

読売新聞社

C. W. ニコルの森^{もり}の時間^{じかん}

著者 C. W. ニコル

訳者 森^{もり} 洋子^{ようこ}

© C. W. Nicol 1994

Japanese translation rights reserved
by GAIFU SHA CO., LTD. Tokyo ☎03-5261-4191

第1刷 1994年(平成6年)12月15日

第2刷 1998年(平成10年)10月12日

編集人 梅田康夫

発行人 黒崎精三

発行所 読売新聞社

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

〒530-8551 大阪市北区野崎町5-9

〒802-8571 北九州市小倉北区明和町1-11

〒460-8470 名古屋市中区栄1-17-6

印刷所 明和印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

Printed in Japan

L i f e i n t h e

W o o d

C O N T E N T S

目 次

S
u
m
m
e
r
夏

63	捕鯨の行方
69	自然を生かす
75	未来への投資
81	
83	虫刺されにご用心
88	野尻湖の命運
92	DNAの銀行
97	自然と人とのきずな
104	弱きものに愛の手を
109	野草の名前
114	悪魔のキス
119	自然にやさしい農薬
124	ダムはほんとうに必要か
129	サワガニのおいしさ
134	虫のお味は？

A
u
t
u
m
n
秋

139	シミアンの日々	161
144	地ビールで乾杯！	154
149	レンジャー育成のために	163
154	リングの花咲く湖	168
161	岩手県民の誇り	173
163	急流下り	178
168	諫早湾の埋め立て	183
173	スキーヤーよ、ゲレンデを出よ	188
178	狩猟の伝統	194
183	ネズミノ	199
188	猿が害獣になるとき	205
194	シャチ	210
199	白神山地	
205	自然界のバランス	
210		

282	ジェルミ・エンジェル	215	開発という名の自殺行為
		217	ワンワン狂騒曲
		223	カワウソ一家
		229	猟師暦
		234	屋久島を守れ
		239	豚の先祖
		244	レンジャー専門学校
		250	消えゆく楽園
		255	ゴミ処理問題
		261	天然素材が最高
		266	北極カラスの物語
		271	鳥たちの祈り
		276	

ブックデザイン

重原隆

本文・口絵写真

南健二

この本は、一年にわたって『デイリー・ヨミウリ』に連載したコラムをまとめたものだ。連載中は、読者の方々からたくさんのお便りやご意見を頂戴した。温かな、激励の声がほとんどだったが、なかにちらほら、抗議の手紙も見受けられた。大方の西欧人にとってはタブーである「捕鯨」や「アザラシ猟」の問題をあえて取り上げたときには、そのテのものが目立った。

とはいえ、それはごく一部で、例によって甚だ幼稚な嫌がらせの類だ。俗な言い方をお許し願えば、そうした輩には「クソくらえ！」さもないや、「てやんでえ、べらぼうめ！」とでも……いや、失礼。それは言わぬが花というものだろう。外国人にしろ、日本人にしろ、読者一般の寛容さはこちらの予想をはるかに上回るものだったのだから。『デイリー・ヨミウリ』の貢献大なり、というわけだ。

コラムの執筆には、かなりのエネルギーを必要とする。新鮮さを失っては意味がない。ここいらで降板

するのが、読者にとっても、『デイリー・ヨミウリ』にとっても、そして私自身にとってもベストではないか——そう考えて、すばらしきナチュラリストである友人のジェルミ・エンジェルに後を託すことにした。ジェルミ、きみのコラムを楽しみにしてるよ。書くほうはひと苦勞だろうけどね。

連載をお読みになっていない皆さんにも、楽しんでいただければ幸いだ。

心をこめて——

一九九四年八月 黒姫にて

Cornical

C・W・ニコル

春

S p r i n g



北極光

私はいま、友人のデスクの前で、電動タイプライターと悪戦苦闘しているところだ。私はこいつが大の苦手で、ワープロに輪をかけて嫌いなのだ。まったく、格好だけは一人前のくせに、自分ひとりじゃスペルはおろか句読点一つ打てないのだから、間拔けな機械もあつたものじゃないか。

まあ、そいつはさておき、私はつい二、三日前にカナダはノースウエスト準州の州都、イエローナイフから戻ったばかりだ。もともと商業と金鉱の町だったのだが、政治の中心となつてからにわかに発展を遂げた。私が初めてイエローナイフを訪れたのは一九六三年のことで、当時はまだ、いたつて粗削りながら気のいい連中が多い町だった。現在のように、スーツ族に席巻される前のことだ。

そのイエローナイフもいまではすっかり、観光の中心地になっている。なかでも、ここ数年人気を集めているのが「北極光」、いわゆるオーロラだ。太陽風にのり、夜空を舞い踊る光のカーテン——この自然の神秘を眺めるには、たしかに世界でも一、二を争う場所だろう。

私が生まれて初めてオーロラを見たのは、十八歳のときだった。一九五八年、これも初めての北極遠征から帰ってきたとき、ニューファンドランドの沖合で、定期船の甲板から見るオーロラは、はるか彼方にいまにも消え入りそうに漂っていた。その後、一九六〇年から六一年にかけて、北米北極研究所のデボン島越冬隊員に任命された折には、オーロラを眺めることが、長い冬の夜を過ごす私たちのなよりの楽しみだった。しかし、いちばん記憶に鮮やかなのは、十月初めのある晩、イエローナイフからやや北寄りの調査隊のキャンプで見たオーロラだ。

イエローナイフから水上機で二十分ほどのところに、私たちはキャンプを設営した。まず初めはチティー湖のほとりにテントを構え、四つの湖の標本採集にかかった。この辺境の湖に生息する魚の種類や数を調査し、万一、商業ベースで漁を行った場合、あるいは乱獲に走った場合に、そのバランスにどのような影響が生じるか、その判断材料を提供するのが最終的な目的だった。

私たちはタイガ（針葉樹林帯）を歩き回って適当な木を切り倒すと、そいつを引きずりながら湖をいくつも越えて、遠路はるばる運んできた。その材木でまず基地となる丸太小屋を築き、栈橋からトイレ、貯蔵庫、小屋を数軒……果ては、サウナまで造り上げたものだ。こうした建設作業のかたわら、計画に基づく集中的な標本採集を進めていた。

私はキャンプの責任者という立場上、計画の作成からスタッフの衣食住、その精神状態にいたるまですべてに目を配らなければならない。隊員、装備いずれもが好調を維持し、規律の乱

れなく計画が予定どおり進行するよう努めるかたわら、その合間をぬっては「ノースウエスト準州一の強烈なビール」造りに精を出していた。

数か月に及ぶキャンプ生活はきついものだったが、九月の終わり、私以下二名の隊員に後を託して、他のメンバーは引き揚げることになった。冬の到来とともに、ようやく訪れた平穏な日々に、私たちは心底ほっとしたものだ。

食意地のはった蚊や羽虫の大群もすっかり死に絶え、十月の声を聞くころには、辺り一帯が燃え立つような紅葉に彩られる。日に日に夜が長くなり、サウナを飛び出し冷たい湖に飛び込むと、湖面にはうっすらと氷が張っていることもしよっちゅうだった。

そう、オーロラが夢のように美しい季節である。

一日の仕事を終えた後、おいしい食事をたいたら、熱々のサウナからキーンと冷たい湖に飛び込む。そして風呂上がりには自家製のビールを一、二杯きゅつとやってから、外へ出て夜空を見上げるのが私の日課だった。晴れた晩には、テントからベッドや寝袋を引っ張り出し、星空の下で寝た。身を切られるような冷気の中で見上げる夜空には、ボウルの中のウナギよろしく、光の帯がくねくねと身を躍らせていた。その彼方にはいく千となくちりばめられた無数の星たち、そして、衛星の描き出す光の弧。ときには、そこにオオカミの群れの遠吠えが重なることもあった。

そういうわけで、コマーシャルで共演中の友人、恐らくは日本一著名な脚本家の倉本聰さん

がオーロラをバックに撮影しようと言い出したとき、だったらロケ地はイエローナイフにしよう、と私のほうから提案した。日本の人たちはどうも、北極というとすぐアラスカに結びつけるきらいがあるが、カナダのために断固抗議を申し入れる（こちらのほうが、高い山々に視界を遮られることもなく……そう、ずっといいこと請け合いだ）。

イエローナイフには、オーロラ見物にはもってこいのツアーがある。われわれロケ隊が選んだツアーは、街から三十分ほどのところに小屋を持っていた。旅行者は街灯に邪魔されることもなく、夜空の饗宴が幕を開けるまでの間、暖かな小屋の中で待つといられるというわけだ。いいいよオーロラが姿を現したときには野外の気温は氷点下二十五度まで下がっていた。空は澄みわたり、上弦の月が雪の上に細い影を引く。月明かりのなか、一面の雪がまさにダイヤモンドをちりばめたような輝きを放っていた。

スタッフが露出合わせに苦心^{さんたん}惨憺、凍るような夜気の中での撮影機材の扱いにてこずる間、倉本さんと私はお呼びがかかるのを待ちながら、さらさらの雪の上に寝そべり、空をたゆたう光のカーテンに飽きることなく見入っていた。

撮影のときにはいつも、お互いぎこちなくならないように、何とかして相手を笑わせようと四苦八苦するのだが、このときはやはりオーロラの荘厳さの前に言葉を忘れた。まっさらな雪を背景に、二人ともただ静かに夜空を眺めながら、心ゆくまでおいしいウイスキーを味わう——そんなカットが撮れたことと思う。私はしっかりと防寒着を着込んでいたおかげで、雪の